知財活動を支える！

情報システム委員会　委員長
中山　明哉 氏
（所属：キヤノン株式会社）

interview

自己紹介

開発部門から知財部門へ異動し、2023年にJIPA情報システム委員会に参加しました。委員長は初年度となります。
　趣味はフットサルです。健康は何をするにも大事ですので、フットサルのような運動をなるべく長く続けたいと思っていますのでケガは大敵です。そのため、毎回テーピングには余念がありません。

Q　研究テーマとそれらを選んだ背景・理由は？

今年度研究テーマ
第１小委員会：知財管理システムに蓄積されたデータを活用した、コスト予測と予実管理、および経営判断に役立つ情報の可視化
第２小委員会：知財調査システムのAI検索の現状と活用法
第３小委員会：知財業務のさらなる効率化を目指す、AI等のIT技術を用いた手法

情報システム委員会は、各国特許庁システム、管理系・検索系システムといった、すべての知財活動の基盤となる情報システムに関連する領域を研究対象にしています。最近は、社内のデータ管理のみならず社内外への情報活用が求められている状況と、AIやRPA（Robotic Process Automation）といったIT技術が知財業務へ適用されている状況があります。これらの状況を把握したうえで、参加メンバーの意見を集約して研究テーマを選定しました。
　また、特にIT技術は日々進化し続けています。小委員会での調査・研究を進めていくうえでは、時期にあった解決策を検討し、必要な修正を加えながら、広く役立つ成果を目指しています。

Q　委員会の特長／魅力は？

メンバー間の一体感が情報システム委員会の特徴だと思います。
　今年度、37名のメンバーでスタートした当委員会の参加企業は多様な業界や分野から参加いただきました。
　当委員会のメンバーが利用する情報システムには、管理系システム、検索系システム、各国特許庁システム、さらにはRPAツール、BIツール、プログラミングツールに至るまで、多岐にわたるシステムがあります。そして、各社採用するシステムは様々であり、各メンバーは、それぞれにシステムを活用して日々の業務を推進しています。
　また、各メンバーは、業務効率向上に代表される共通の目的意識を持ちます。
　この多様性と共通性を備えたメンバーが集まることによって、そして、以下の活動を通じて当委員会の一体感が醸成されていると考えています。

●個別の工夫と知識の共有
　各メンバーは採用しているシステムを用いて、それぞれに工夫されて成功事例が生まれます。また、失敗事例も生まれることがあります。私たちはこの知見を共有し、相乗効果を生み出すことで、知的財産管理の効率化と最適化を図ることができています。

●交流を促進する役割マトリクス
　小委員会は、情報システムにおける特定の課題に対して研究し、その領域に対する最新の課題解決を目指すことで、深い専門知識が得られ、委員会全体の知見が広がります。一方、小委員会を超えた交流を促すために、ポスター担当、合宿担当といった役割マトリクスを採用しており、小委員会の枠を超えて、他のメンバーと協力し合います。これにより、委員会内の対話はより活発になり、親睦を深める機会を得られています。

●委員会外の活動への参加
　外部のセミナーや知財情報フェアへの参加による情報収集、特許庁とのシステム面における意見交換はもちろんのこと、システム開発メーカーとの意見交換も随時行っています。これにより、世の中の動向に敏感なメンバーの好奇心をそして、対外活動参加メンバー含めて多くのメンバーとの情報交換や議論を行うことによって、小委員会を超えて交流が生まれるとともに、新たな視点を得る機会を得られています。

Q　委員会としてのこだわりは？

情報システム委員会では、情報システムによって会員企業の知財活動を支えることができるように、上述の取り組みを通じて会員企業に成果を還元できることを第一に考えています。
　そして、その実現のためにも、メンバーが委員会への参加を楽しむことができるように、目標を実現できるように、意見を出しあって継続的に改善・進化し続けていきます。